

公募研究 A02 (課題番号：06208203・07205203)

大韓民国に残る琉球・沖縄に関する史料情報のデータベース化

研究代表者：松原 孝俊・九州大学・言語文化部・教授

1. 研究項目：A02 環東シナ海地域間交流史
2. 研究課題名：大韓民国に残る琉球・沖縄に関する史料情報のデータベース化(課題番号：06208203)
大韓民国に残る「琉球・沖縄関係資料集成」作成のための基礎的研究
(課題番号：07205203)
3. 研究期間：平成6年度・平成7年度
4. 配分研究費：平成6年度 1,700千円
平成7年度 1,000千円 合計 2,700千円
5. 研究組織(氏名：所属機関・部局・職)
(研究代表者)松原 孝俊：九州大学・言語文化部・教授
(研究分担者)六反田 豊：九州大学・文学部・助教授
6. 研究目的
本研究の狙いは、韓国内で発掘されるはずの新資料の公表とデータベース化であり、これは歴史分野のみならず言語・民俗・歴史・社会学・農学などの広範囲な学問領域に新しいデータを提供することになる。
先駆的研究には、早くに伊波普猷や嘉手納宗徳・和田久徳の3氏による優れた業績があるが、残念ながら『朝鮮王朝実録』に限定されており、本研究に類するような様々な分野にわたる文献史料から、綿密に琉球・沖縄をめぐる記事を丹念に網羅した本格的研究の存在を管見の範囲では知らない。あわせて本研究と時期を同じくして韓国で公開された『朝鮮王朝実録』CD-ROM(ハングル版)を活用して、それに収録された関係語彙検索を実施し、これまで以上に精度の高い関係記事の質と量を拡充することにある。
本組織が行う研究は、多くが朝鮮語を全く解しない琉球史研究者ではとうてい不可能である。また琉球に関する知識や関心をほとんど有しない韓国にあって、将来とも研究の進展が期待できないものであった。
7. 研究実施計画

具体的な作業手順としては、まず『朝鮮王朝実録』や各種文献の中に散在する史料の網羅的収集とイメージスキャナーを活用した画像処理。

これまで未公表であった琉球関係資料の紹介（「漂流記」やソウル大学所蔵の李朝政府記録など）

『燕行録選集』（韓国成均館大学校大東文化研究所刊）をはじめとする各種の燕行録を可能な限り収集し、それに記述された主に清代における琉球朝貢使節と朝鮮使節間の外交交渉の実相を具体的に解明すること。

北京に派遣された朝鮮使節らが会同館での琉球朝貢使と接近することで、漢詩文などを贈答したり、あるいは相手国の文化・風俗などの情報を交換したりしたが、そうした文化接触の様相を解明したいこと。

琉球と朝鮮との地域間交流史に関する韓国内で発表された研究情報の収集とデータベース化。

韓国内にある「琉球に関する史料所在情報」の現況確認とその目録作成。

8. 研究経過

最初に着手したのは、琉球・朝鮮両地域間交流史に関する韓国内で発表された研究情報の収集であった。というのも日本ではその言語的制約もあり、韓国での研究状況は殆ど知られていなかったからである。むしろ1997年現在でも、その事大主義的色彩の濃い韓国史学界にあって、琉球史の専門家は韓国内に皆無であるが、それでも琉球を含めた南蛮貿易や文禄慶長の役に関係した琉球側の動きを考察した論文などが数編発表されてきた。手掛かりとしては、『現代韓国歴史学論著目録(1945～1980)』（韓国歴史学会編）を初めとする各種の研究目録であったが、別掲するリストで判明するように、我々の関心と符合する琉球・朝鮮間の歴史的・文化的交流を考察した論文は、管見によると1964年の李鉉涼氏のそれが最も初期の業績ではなかったかと思われる。しかしながらその後も、つい最近に至るまで韓国における琉球研究はきわめて低調であり、日本による朝鮮半島植民地統治の研究や古代日朝関係史（考古学を含む）の膨大な研究蓄積と比較すると、実に対照的である。

管見によると、1964年から1994年までの30年間の研究業績はおよそ30編あまりに過ぎなかった。

韓国における琉球研究は、およそ2期に分けられるはずである。第1期は1964年から1983年までの20年間であり、この間の研究は量的にも少ないばかりでなく、数人の民俗学者が日本訪問時に沖縄に足を伸ばし、その際のごく短期間のフィールドノートを簡略に記述しただけに過ぎない。

したがって長期間に渡る沖縄での滞在を通して観察された密度の高い比較民俗学的調査報告ではなく、シャーマニズムや親族組織（特に沖縄の系図と韓国の族譜との比較を中心に）を取り上げて、それらの対比に止まっているのが実情であった。ある研究者のように、朝鮮半島からの伝播の結果、沖縄・琉球民俗が成立したとする極論も発表されている。

韓国における琉球研究の転換点は、1987年に開催された第1回中琉歴史関係国際学術会議への韓国人研究者の参加であった。海外渡航の自由化という外的条件が整ったという理由もあるが、李鉉熙氏や李享求氏らの活動は韓国史学界に与えた影響は大きかったようである。ただし両氏ともに既にハングル世代に属する研究者であるために、十分な日本語運用能力に欠けるために日本の研究業績の蓄積に無知であったのは残念であった。第2期の琉球研究の主導的役割は韓日関係史研究会である。その会員の大多数は日本留学を終えた者たちであったので、彼らは日本史学界における研究の現段階に精通していたばかりでなく、各種琉球関係史料にも明るかった。李鉉熙氏らが一貫して『朝鮮王朝実録』

のみを活用するに止まるのに対し、楊秀芝・閔德基・李薰氏等は『歴代宝案』や『沖縄県史料』などを駆使して、本格的な琉朝関係史を論議し始めたのである。また中国（台湾）や欧米の研究にも目配りしている点も、特徴の一つである。この第2期の研究史に関しては、研究分担者の六反田豊氏が強調するように、閔德基氏らが「あくまでも朝鮮を中心に据えて、朝鮮と周辺諸国家との関係を論じるという発想から自由でない」ために、東アジア世界の中に琉球・朝鮮関係史をどう位置づけるのかという課題に対しては、いずれの論文も答えを出していない。それゆえに琉朝関係史を朝鮮の事大交隣体制の一環として位置づけるべきであることは当然としても、しかしながらさらに視野を拡大し、事大交隣体制もまた東アジア世界に多様な形で存在した国家・地域関係の一つの在り方であると考えることで、事大交隣体制そのものを相対化する視点が獲得できるように思われる。いうまでもなく朝鮮は琉球との関係をも維持することで、相互に影響し合う重層的な世界を作り上げたのであり、そうした東アジア世界における国家・地域間の多元的な交流と有機的な関連において、琉球・朝鮮関係史を実際にどの様に作り上げて行くべきかは今後の課題として残されており、当該分野の研究の進展が期待される。

つぎに本重点領域研究が推進する「琉球史料集成」作成を念頭に置き、『朝鮮王朝実録』や各種文献の中に散在する関係史料の網羅的収集に着手した。

琉球関係史料が収録されていると予想される資料情報は、

1. 『朝鮮王朝実録』（全57巻、学習院大学東洋文化研究所・刊）
2. 『文献備考』（洪鳳漢・編、全250巻、明文堂・刊）
3. 『通文館志』（金慶門・編、1冊）
4. 『海行総載』（成大中・編、朝鮮群書大系本、全4冊）
5. 『五洲衍文長箋散稿』（李圭景・編、全53巻、全2冊）
6. 『燕行録選集』（総19種の燕行録、成均館大学校大東文化研究院・刊）
7. 『稗林』（野史96種、総数169冊、全10巻、探求堂）
8. 『大東野乘』（野史57種、全12冊、朝鮮古書刊行会本）
9. 『東国文献備考』（全3巻、明文堂・刊）などの記録類

などである。これらからの沖縄関係史料の抽出とその記事集成の作成が期待される所であるものの、さらには膨大な巻数の

10. 『韓国歴代文集』総3000巻、景仁文化社
11. 『承政院日記』（全3047巻）
12. 『日省録』（全1329巻）
13. 『同文彙考』（正編60巻、続編36巻、計96巻）
14. 『備辺司謄録』（全273巻）
15. 『通文館誌』（12巻6冊）

などにも相当数の関係記事の存在が見込まれるのである。

科学研究費の支出制限上、海外出張が許されなかったため、松原は私費での韓国旅行（1996年7月12日～7月20日）を行い、各種資料と情報収集を実施した。特に韓国国史編纂委員会の宗家文書とソウル大学校奎章閣での資料調査は収穫が多く、これまで知られていなかった第1次資料が数多く発見できた。

また時期を異にして、同じく私費にて松原は済州大学校図書館を訪問し、郷土資料室所蔵の文献から多数の関係資料の所在を確認したが、その中でも最重要な資料が『済州啓録』(ソウル大学校奎章閣所蔵本)であるとの認識に達した。済州島に続いて、松原は韓国釜山市立図書館を訪問したが、その際に文昌度図書館長<当時>から意外にも貴重書所蔵目録作成の依頼を受けた。釜山市立図書館の貴重書の多くは旧在釜山日本領事館及び旧釜山府立図書館からの移管品である。総数646種、3204冊に及ぶ日本書の目録作成に従事できたのは、本重点領域研究に参加を許された副産物であると感謝しているところである(『釜山広域市立市民図書館所蔵・古書目録』1995年4月刊)。興味深い史料は、昭和12年に旧在釜山日本領事館保存資料移管された資料の中にある『航韓必携』中の「琉球藩調」ほかであろう。

具体的なデジタル化作業として最初に手がけたのは『朝鮮王朝実録』(学習院大学複製本)中の琉球・沖縄関係記事であるが、その理由は松原が既に関係記事カードを有していたためであった。それに加えて『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成』(国書刊行会)や嘉手納宗徳・和田久徳両氏の記事集成があるために、それを参照しながら、またそれらのいずれにも漏れている記事の補充に腐心した。

作業手順としては、学習院大学本から関係記事を整理した『韓国の沖縄関係資料情報(1)』文部省科学研究費重点領域「沖縄の歴史情報」研究報告書(課題番号07205203)121頁、1995年3月を編纂しつつ、その各頁をイメージスキャナーに取り込み、画像処理を施した上で、インターネット上で公開する準備を進めた。最初からイメージスキャナーによる画像情報の取り込みも検討を重ねたが、それでは各頁の関係項目の分量の少なさをゆえに無駄が多く発生するおそれがあったので、今回はそれを見送ることとした。

松原が使用したシステムは、CPUがPower Macintosh 8500/120AV、外付ハードディスク(容量1GB)、光磁気ディスクドライブ(MO、媒体容量は230MB)、CD-ROM、イメージスキャナー(Epson GT-8500)に加えて、画像処理ソフトAdobe社のPhotoshop 3.0Jなどである。

イメージスキャナーによる『韓国の沖縄関係資料情報(1)』のデジタルデータは256階調グレー、100DPI、GIF(容量288~320K)245頁、HTML(容量64K)246頁で格納・保存されたので、今後は全57巻に達する書籍によることなく、むしろ学習院本以上の解像度が保証された。さらにはグラフィックソフトの一種であるフォトタッチソフトは本来写真データを修正・加工するものであり、画像処理ソフトAdobe・Photoshop 3.0J<当時>はその種のソフトの中でも良質のものであるが、松原はこの画像処理ソフトを活用しながら、一つの画像の編集・移動(ペースト)・変形・回転・拡大・除去などの処理を施した。その理由は、「一つの画像に対して、複数個のレイヤーを定義する事ができる」ことにある。

しかも『韓国の沖縄関係資料情報(1)』のデジタルファイルは研究代表者松原のホームページである、<http://matsu.rc.kyushu-u.ac.jp/home.html> で公開されたので、テキスト画像情報のインターネットのWWW(World Wide Web)サーバーによって、国内外にこれに関する情報の受信が可能となった。もはや高価で冊数の多い書籍を手にする必要はなく、経済的で簡便な研究条件が整備されたと言えよう。

本公募研究のきっかけとなったのは、松原の朝鮮人漂流記に対する興味からであったので、本研究班も収集に努めたが、その朝鮮人漂流記の総数は別記の17種であった。そのうち本重点領域研究と

関連を持つ琉球への漂流記録は7種である。一般的に資料保存が希薄とされる「前近代の沖縄研究」において、伊波普猷が紹介した1479年の漂流記（『成宗実録』巻105所収）を通して、多くの琉球民俗情報が提供されたことは周知の通りであり、琉球研究における朝鮮人漂流史料の価値は決して低くないはずである。今後も当該史料の発掘に努める必要がある。

また兩年度に実施した資料収集作業を実施する中で、朝鮮古典小説『琉球王子世子外伝』が見出された。濟州島に漂着した琉球王子の悲劇をテーマとしたこの作品は、前近代の朝鮮における琉球知識の提供源ともなった。この他にも、『同文彙考』・『通文館志』・『国朝五礼儀』・『濟州啓録』・『燕行録選集』などにも手を広げて、将来編纂される予定の「琉球史料集成」構築のための基礎固め作業を実施し、応分の成果を上げたと思考する。

朝鮮人漂流記一覧

	漂流者	発生年	漂流地	出典
1	梁成ら 10 名	1456 年	琉球	『李朝実録』
2	肖得誠ら 8 名	1462 年	琉球	『李朝実録』
3	金非衣ら 8 名	1472 年	琉球	『李朝実録』
4	李暹ら 33 名	1483 年	中国長沙鎮	『李朝実録』
5	崔溥ら 43 名	1487 年	中国浙江省寧波府	『漂海録』(崔溥)
6	張廻伊ら	1499 年	九州の島	『李朝実録』
7	金紀孫ら 12 名	1534 年	中国淮安衛	『李朝実録』
8	朴孫ら	1542 年	琉球	『裨官雜記』
9	高商英ら 24 名	1687 年	安南国会安郡陽徳府	『畫永編』(鄭東愈)
10	李志恒ら 8 名	1756 年	北海道蝦夷	「漂舟録」(『海行総載』所載及び 東京大学中央図書館所蔵写本)
11	張漢吉ら 29 名	1770 年	琉球	『漂海録』(張漢吉)
12	李邦翼ら 5 名	1796 年	中国福建省澎湖府	『燕巖集』
13	文淳得ら	1801 年	琉球・呂宋	『漂海録』
14	崔斗燦ら 50 名	1818 年	中国浙江省寧波府	「乗槎録」(『罷睡篇』所収)
15	金光顯ら 7 名	1828 年	南海普陀山	「耽羅漂海録」(『心田稿』所収)
16	濟州島民ら 33 名	1771 年	琉球	「濟州漂人問答記」(『燕轅直指』所収)
17	朴元良ら 16 名	1845 年	日本	『漂民對話』

9. 主要研究業績

松原孝俊：『韓国の沖縄関係資料情報(1)』文部省科学研究費重点領域「沖縄の歴史情報」研究報告書(課題番号07205203)121頁、1995年3月

松原孝俊：『釜山広域市立市民図書館所蔵・古書目録』釜山広域市立市民図書館、285頁、1995年4月

松原孝俊：「蝦夷に漂着した朝鮮人」『九州歴史』58号、九州歴史大学、12～14頁、1995年5月

松原孝俊：「韓国における沖縄研究の動向」(『沖縄の歴史情報ニュースレター』、第5号、10～11頁、1995年7月)

松原孝俊：「韓国における沖縄研究と琉球資料」重点領域研究『沖縄の歴史情報』全体会議・シンポジウム、1995年7月（口頭発表）

松原孝俊：「韓国における琉球関係史料と歴代宝案」沖縄県歴代宝案編集調査委員会、1995年11月（口頭発表）

松原孝俊：「コンピュータ画像処理により可読された『牟頭婁墓誌』釈文に関する研究」『平成7年度年報』福武学術文化振興財団、1996年11月、67～76頁

六反田豊：「新出の大同法関係史料について」『年報朝鮮学』第5号、九州大学朝鮮学研究会、1995年7月、pp.107-146

六反田豊：「須川英徳著『李朝商業政策史研究 十八・十九世紀における公権力と商業』」『アジア経済』第36巻第11号、アジア経済研究所、1995年11月、PP.79 - 82

六反田豊：「近世における日本と韓国 その国家統治形態の比較」小竹一彰編『アジアを知る、九州を知る』九州大学出版会、1996年3月、pp.127 - 152

10. 情報化資料の概要

まず公開が可能となったものに、朝鮮人漂流記リストがある。環シナ海域の交流を考える上でも重要な資料であるだけに、著作権に問題のないものだけはリストの各項目にリンクを張ることで容易に画像情報として入手できるように努めた。

本重点領域研究では、その研究目標がコンピュータを用いた沖縄関係資料の情報公開・発信にあるとすれば、当面の最大目標である『沖縄史料集成』構築の一環として、当然ながら公募研究者にも、各自のWWWにホームページの構築が要求されていたように思う。1995年度になり、その準備が整い、HP (<http://matsu.rc.kyushu-u.ac.jp/home.html>) を幸いにも立ち上げることが出来た。その中に、昨年度の研究成果である『韓国に残る沖縄関係資料情報(1)』を121頁で作成した。